

当科で経験した降下性壊死性縦隔炎の2症例

伊藤 伸 藤巻 充寿 大峽 慎一
飯塚 崇 楠 威志 池田 勝久

順天堂大学医学部附属順天堂医院耳鼻咽喉・頭頸科

深頸部感染症は頸部間隙内に生じた感染症の総称であり、病態が進行すると気道狭窄、縦隔炎、敗血症、大血管の破綻などの重篤な合併症をもたらす。抗菌薬の発達した現在においても致死性である。降下性壊死性縦隔炎は、耳鼻科疾患、歯科疾患による深頸部感染症が、重力や呼吸運動、胸郭内の陰圧などにより間隙から縦隔に波及した状態で死亡率は約40%とも言われている。今回我々は、対照的な転機を辿った降下性壊死性縦隔炎の2症例を経験したので報告する。症例1, 57歳 男性【主訴】発熱・頸部腫脹【現病歴】平成20年6月初めから38℃台の発熱、咽頭痛を自覚し同年6月9日に内科を受診した。抗生剤を内服するも症状が増悪し、皮膚発赤を伴う頸部腫脹も出現したため、6月11日に当科紹介受診となる【既往歴】高血圧【経過】頸部・胸部造影CTにて広範囲に膿瘍腔を疑う低吸収域を認め、頸部膿瘍・降下性縦隔炎の診断にて6月11日緊急手術となった。手術により頸部、縦隔から排膿され、抗菌薬の投与にて術後33日で退院が可能であった。症例2, 59歳 男性【主訴】咽頭痛・呼吸苦【現病歴】平成18年7月3日より咽頭痛を自覚し、経口摂取困難となり、頸部腫脹と呼吸苦が出現したため、7月5日に近医救急外来を受診した。心疾患を疑われ、精査が進められたが、CTにて頸部・縦隔内にガス産生を伴う膿瘍形成を認め、7月6日、当科受診となった。【既往歴】特記事項なし【経過】頸部膿瘍・降下性壊死性縦隔炎の診断にて同日緊急手術となる。頸部は排膿が可能であったが、縦隔は全身状態が不良であったため排膿できなかった。強力な抗菌薬投与にも関わらず術後37日で死亡された。明らかな基礎疾患のない同年代男性の2症例であるが、症状の増悪から初期治療までの時間、手術による縦隔操作の有無に相違があり、救命の分岐点であった可能性がある。